

氏名	<small>いなうら あや</small> 稲浦 綾
本籍	大阪府
学位の種類	博士（情報学）
学位の番号	甲第36号
学位授与年月日	平成25年3月15日
学位授与の要件	本学大学院学位規則第6条
学位論文題目	多人数一斉授業での実行性の高い個人指導を目指した大学授業研究
論文審査委員	主査 教授 魚井 宏高 副査 教授 登尾 啓史 副査 教授 上善 恒雄

## 論文内容の要旨

本研究は、大学教育において、教育の情報化、特に授業の情報化をはかり、昨今入学してくる多様な学生に高い教育効果を与えるための個人指導の実践とその実行性を高めることを目指すものである。

教員はシラバスだけではなく、毎回の授業において、授業の内容や指導の案(Plan)、実際の実施内容と変更点(Do)、授業の自己評価(Check)と次回または次年度への改善案(Action)を記録することにより、授業の情報化を図り、受講生には授業に対する内面的な状態（気分、体調、満足度、理解度、やる気の状態など）を明確にさせることで授業の情報化を図る。これを実現するため、教員が毎回の授業の内容や案、実施、自己評価を記入するための「教案・指導方針・結果記録シート（以下、教案シートと記す）」を開発し、受講生には受講状態を明確にするための「自己評価シート」を

用いている。これらのシートにより得られる情報から、2つのアプローチで個人指導を実施している。

1つめは「シート・コミュニケーションによる個人指導」である。学生が「自己評価シート」に記入した内容、すなわち、気分と体調の度合い、満足度と理解度の度合いに加え、自由記述欄（コメント欄）に記入された内容から、コメント欄に朱書きすることで学生とコミュニケーションを図り、かつ、個人的に指導が必要と感じられる学生には、次週の授業時に個人的な指導を行っている。

2つめは「算出値による個人指導」である。学生が「自己評価シート」に記入した内容の内、気分と体調の度合い、満足度と理解度の度合いといった数値化できるデータに注目し、授業開始時の状態から授業終了時に記入される値を予測し、実際の学生の記入と比較するという方法である。算出値よりも実際の記入値が低くなっている場合には、次週の授業時に個人指導を行っている。なお、いずれのアプローチでも、個人指導を行う際には、実施した授業内容を振り返る必要があるため教案シートを活用している。

上記2つのアプローチにより、多様な学生に対し、個人指導を必要としている可能性のある学生を主観的でない方法で抽出できるようになり、教育効果の向上につながっている。

また、これらの指導の過程で、授業コンテンツの充実も教育効果を向上するひとつの要素であることがわかり、学生の受講状態の把握とともに、授業コンテンツ（教科書や演習のテーマ）についても研究を進め、授業で使用する教科書、演習テーマの開発を行った。

また、本研究で利用している教員が記入する「教案シート」はティーチングポートフォリオ（TP）として、学生が記入する「自己評価シート」は学生自身のラーニングポートフォリオ（LP）の一部として活用することがで

きると考える。シートと教材の事後活用を大いにすすめ、TP、LP として活用することで、ファカルティ・ディベロップメント（FD）活動への展開を提案するものである。

## 論文審査結果の要旨

本論文で提案されている大学授業における個人指導の2つのアプローチは、いずれも教員の主観によって個人指導の対象となる学生を選ぶものではなく、受講生が記入する「自己評価シート」の記入内容（気分・体調・満足度・理解度の度合いといった数値化できるデータとコメント）により個人指導の対象者を選んでいることに新規性がある。これまでの個人指導対象者の選び方（机間巡視やレポート内容による方法）では見落とされていた可能性のある学生を抽出することに成功している。

また、個人指導を的確に行うため、受講生の記入する「自己評価シート」で学生の受講の状態を明確にすることに加え、教員の記入する「教案・指導方針・結果記録シート」を用いて、授業の内容や指導の案(Plan)、実際の実施内容と変更点(Do)、授業の自己評価(Check)と次回または次年度への改善案(Action)を明確にし、授業の情報化を図っている点も妥当である。加えて、個人指導に終始せず、全体的な授業改善として独自の授業コンテンツ（教科書や演習テーマ）の充実を図り、継続的に授業研究を行っている点も評価できる。

「教案シート」と「自己評価シート」のティーチングポートフォリオ(TP)とラーニングポートフォリオ(LP)としての活用による、ファカルティ・ディベロップメント(FD)活動への展開は大いに期待できる。2008年の大学教育におけるFD活動の義務化を受け、大学授業研究の必要性はますます高まっており、この研究はその一助となりうる。

最後に、今後の課題として挙げられている「省力化」と「普及」について、本論文で活用している2種のシートの記入、チェック、分析をシステム化するという解決方法を提案しており、今後の展開にも期待できると考える。

関連する成果も適切に公表・発表されており，研究成果は十分に周知されていると考えられる．

以上より，本論文の審査結果は「合格」とする．

論文審査委員 主 査 教授 魚 井 宏 高  
副 査 教授 登 尾 啓 史  
副 査 教授 上 善 恒 雄

## 論文審査結果の要旨

最終試験の結果、合格と認める。

論文審査委員	主査	教授	魚井	宏高
	副査	教授	登尾	啓史
	副査	教授	上善	恒雄